
中国夜行列車団体旅行

野鶴善明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

中国夜行列車団体旅行

【Nコード】

N5613I

【作者名】

野鶴善明

【あらすじ】

この間、中国の夜行列車に乗って仕事と研修をかねた社員旅行に行ってきました。寝台車のなかで中国人の同僚たちはトランプの大富豪をやっておおはしゃぎ。夜は屋台で酒盛りしておおはしゃぎ。中国の夜行列車と中国人の様子を描いた紀行エッセイ。

前編

この間、勤め先の会社の業界でイベントがあったので、仕事と研修と社員旅行を兼ねて、三十人くらいの同僚たちと一緒に夜行列車に乗って広西壮族自治区の省都・南寧^{なんねい}まで行くことになった。

中国では何度も夜行列車に乗っているけど、団体で乗るのは初めてだ。しかも、同僚は、日本人が一人いるだけであとは全員中国人さて、どうなることやら楽しみだ。

夕方、五時前に広東省の広州駅を出発。

乗ったのは日本のB寝台にあたる硬臥車^{こうがしや}で、三段式ベッドがずらりとならんでいる。

上段、中段、下段のどれが快適なのかは好みによるだろうけど、僕は中段が好きだ。上段だとのぼりおりするのが面倒だし、窓の外が見えない。おまけにエアコンの吹き出し口の真下なので、風がけっこうきつかったりする。車内をぎんぎんに冷やすの好きな車掌にあたりたりすると、こちらは凍え死にしそうな思いを味わうはめになってしまう。下段はのぼりおりしないでいいので楽のだが、消灯時間以外は誰でも坐っていいことになっているから、眠りたいのに横になれなかったりする。この点、中段ははしごをちよつとのぼればベッドに上がれるし、窓の外も見える。眠りたい時にはすぐに横になることができる。けっこう便利だ。僕に割り当てられた切符は下段だったので、同僚に交換してもらい中段で寝ることにした。

すこしばかり雑談した後で、案の定、トランプが始まった。案の定と書いたのは、中国人団体客と乗り合わせるとかならずトランプをしている姿を見たからで、どうやらこれがお決まりらしい。

「日本の『大富豪』をやろうよ」

と僕が言うと、中国人の同僚は興味津々にうなずいてくれた。

大富豪には八切りやらしばりやら複雑なルールがたくさんあるけど、それはカットして、革命だけOKということにしておいた。彼

らに説明するとわりと飲み込みが早い。どうしてだろうと思つて訊いてみると、中国にも似たようなものがあるそう。もしかしたら、大富豪はマージャンみたいに中国から日本へ伝わったものなのかもしれない。「革命」なんていうルールがあるのも共産主義国家らしいし（もつとも、二十一世紀の中国で社会主義や共産主義なんてもう完全に過去のものだけだ）。

けっこう盛り上がった。

ずっとド貧民から抜け出せない同僚が一人いて、彼は「席を替わつてくれ、ここは風水が悪いから」なんて叫んで席を替わつてもらふし、誰かが革命をやってみせるとみんな叫び声をあげてはしゃぐ。日本だと寝台車のなかで騒ぐのはためらわれるが、中国人はそんなことを気にしない。陽気に騒いで楽しんだ者が勝ちだ。

ひとしきりトランプで遊んだあと、小腹が空いたので同僚と連れ立って食堂車へ行つた。だけど、もう品切れで飲み物しか出せないと言われてしまった。食堂車では職員たちがそこかしこに坐り、食い散らかした皿を前にして楊枝で歯をほじっている。そんな姿を見ると割り切れない思いと食い物のなんとかを感じるが、ないものはいしょうがない。すぐごと寝台車へ引き返すともう消灯していた。十時すぎだった。

消灯してしまうとはしゃぎ声がぱったりやむ。

ひそひそ声で話している人たちはやはりいるけど、たいていは大人しくベッドへ入って横になっている。はしゃぐべき時は思い切りはしゃいで、寝るべき時はさっさと寝る。わりと規則正しい生活を送る人たちだ。僕はベッドで横になってすぐに眠りに落ちた。

翌朝、用を足しにトイレへ入ると、水が切れていた。ぼつとん式なので、水洗式ほどひどいことにはならないが、やはり水で流さないとたまってしまう。車掌がときどき、バケツに入れた水でざあつと流すのだが、なにせ朝なので次から次へとみんな用を足すから追いつかない。くさいけどがまんするしかない。くさいのはがまんできるけど、もれるのはがまんできないから。それはいいとして、手

を洗えないのにはちょっと困った。自分でウェットティッシュを用
意しておくべきだった。

慌しく身支度しているうちに、朝の六時半頃、南国の雰囲気が漂
う南寧駅へ到着した。乗車時間は約十二時間半。いつもは元気いっ
ぱいの同僚たちもさすがに眠そうだった。

後編

イベント会場のホールでセミナーがあつて、業界で名の知られた日本人が二人、一人ずつ順番に講演した。

中国人はとにかくノリがいい。

後ろのスクリーンに面白い画面が出ると一斉に笑いはじけるし、すばらしいと思えば割れんばかりに拍手する。二時間ばかりのセミナーが終わると、大勢が演壇へ押しかけ、講師に花束を渡したり、サインを頼んだり、講師を囲んで記念撮影したりする。おまけに、通訳者まで取り囲んで講師のことを聞き出そうとする。

「日本だったら、ここまで盛り上がらないよ」

日本人の同僚は、中国人の情熱にびっくりした様子だった。中国人はとにかくひたむきだ。彼らの姿を見てみると、こんな熱い人たちの国がめざましい経済成長をとげるのは当然だろうなと思うし、今がこの国のいちばんいい時期なんだろうなとも思う。

忙しい合間を縫って、南寧なんねいの繁華街をすこしばかり散歩してみた。
広西壮族自治区くわいせいぞうくの隣りはベトナムとあつて、南寧は亜熱帯の気候だ。

もう十月末なのに、日中の気温は三十度を越し、街角にはガジュマルや名前も知らない南国らしい樹がいっぱい植わっている。けっこう発展した都会だけど、地方都市のおだやかさと南国にありがちなおびやかさがあつて、町の雰囲気はどこかほんわりしている。

道にはペダルつき電動スクーターがいっぱい走っていて、その形が面白い。自転車にモーターの箱をくっつけただけでデザインもなんにもしていない。子供のおもちゃのようでなんとも不恰好なんだけど、よくよく見ればそれなりの愛嬌がある。格好をつけない素すのよさとも呼べばいいのだろうか。

壮族（チワン族）という名の少数民族が多いので、道行く人々の顔かたちも、ほかの町とは違う。壮族は、その昔、タイ族（タイ人

と同じ民族)から枝分かれした民族だ。だから、顔つきがタイ人に似ているし、性格も温和でおとなしい。ちなみに、壮族の総人口は約一八〇〇万人。中国では少数民族扱いにされているけど、東京都の人口よりもはるかに多いし、オランダ一国の人口より多い。彼らだけで十分、一つの国を作れるほどだ。

夜、繁華街のすぐそばにある屋台通りへ行った。

二百メートルくらい道の両脇に屋台がびっしりならんでいる。人々がそぞろ歩きして、屋台では串焼きを食べたり酒盛りしている祭りのようだ。

ぶらぶら歩きながら屋台をひやかしてみた。炭焼きの網のとなりには、豚肉、牛肉、羊肉、野菜の串焼きといったごく一般的な材料のほか、珍しいものがある。生きたザリガニや赤と白のまだら模様のカニがボールに入れてあつたりするし、かなり大きな焼きシヤコがお盆ならんでいたりする。屋台の下には籠があつて、そのなかに鶏、鳩、雀、それから名前は知らないけどチャボのような鳥、ウズラに似た鳥なんかが入っている。ほかにどんな鳥がいるのだろうと見ていると、屋台のおにいちゃんが、

「今さばいて焼くよ。おいしいよ。新鮮だよ」

と陽気に声をかけてくる。僕はとても頼む気にはなれなかったけど、日本の活魚のような感じなのだろう。

いちばんびっくりしたのは、ワニだった。

屋台のうえに胴体をぶつんと二つに切ったワニが乗っかっている。体長は全部で一メートルちょっとあるだろうか。かわいそうなワニは眠っているように目を閉じていた。胴体をつなげてあげれば、また動き出しそうだ。輪切りになった断面から白身の肉が見えたのだけど、その肉はなんだか魚のようだった。

屋台通りでは悲しい光景も見た。

小学校高学年くらいのお兄ちゃんと小学校へ上がるか上がらないかくらいの小さな妹が通りの入り口で花を売っていたのだけど、初老の警備員が少年と少女の花を取り上げて、ばきばきに折って放り

投げてしまった。

中国の繁華街では彼らのような花売りをよく見かける。花売りはカップルを見かけると一輪のバラを勧め、男がそれを買って、女にプレゼントするのだ。屋台通りでは花売りは禁止だからダメ、ということなのだろうが、少年にしてみれば生活がかかっている。少年は激昂して、早口になにかをまくし立てて初老の警備員に体当たりした。目の前でつかみ合いがはじまる。怒った初老の警備員はお返しに少年の頬にパンチを一発くらわせた。しばらくもみ合ったあと、やがて少年は捨て言葉を吐いて、夜の街へ消えて行った。

中国は日本以上に貧困の問題が深刻だ。

幼い頃、『マッチ売りの少女』の絵本を読んだけど、それは遠い世界の話だった。日本ではとくに過去のものになったはずの話だった。でも、中国ではそれが現実のものとして、目の前に現れる。中国人の成金が続々と誕生して、日本の銀座なんかでブランド品を買いあさったりしているけど、発展から取り残されて食うや食わずの暮らしを強いられている人々がまだまだ大勢いる。花売りの少女の姿が早く消える日がくればいいと願うばかりだけれど、そうなるのは、はてしなく遠い将来のことのようだ。

同僚たちと屋台で酒盛りを始めた。

中国では酒を飲む時にサイコロを振って遊ぶ。いろんな遊び方があるけど、この時は「七八九」というゲームをやった。

まず、店に頼んでサイコロを出してもらおう。酒場ではたいていサイコロを用意しており、客に貸してくれる。サイコロ二つとコップ二杯を置いて準備完了。サイコロを二つ振って、合計の数が、七になればコップにビールを注ぎ、八が出ればコップに入ったビールを半分飲んで、九が出ればすべて飲み干す。一のぞろ目が出ると、それを出した人は誰かを指名して全部飲ませることができる。それ以外の場合は、なんにもなしで、次の人がサイコロを振る。

はじめのうちは運がよくて、飲まなくてもすんだのだけど、そのうちツキに見放されて調子がおかしくなった。なんだかしらなけど、

八と九ばかり出る。もともと酒に強いほうではないから、すぐに酔って来た。腹がふくれて、げっぷが出る。飲み干そうとしても、もう入らない。みんなも酔っているし、わけがわからなくなってしまうた。

南寧からの帰りは、十九時半発の夜行列車に乗った。

駅の入り口で切符を見せて構内へ入り、エックス線の荷物検査機にリュックを入れる。列車の待合室へ入る時にもう一度切符を見せたのだが、身分証を見せると係員に言われた同僚もいた。

中国政府はテロが発生するのを恐れている。新疆ウイグル族自治区でも、チベット族自治区でも火種を抱えているから、いつでもテロが起きてもおかしくない。実際、雲南省の昆明こんめいで市内バスが爆破されたりしている。ウイグル族も、チベット族も、暴力によって自分たちの土地を奪われ、暮らしを奪われた。それが対話によって取り戻せないとしたら、あとは暴力に訴えるよりほかに手段がない。暴力によって奪われたものは、やはり暴力によって取り返すしかないのが、この世の悲しい現実なのだろう。

途中の停車駅でホームに降りて、ジャンボ粽ちんぼを買った。日本のコンビニおにぎりを二つ半ほど合わせたくらいの大きさがあって、食べ応えがある。紐をほだいて三角形の粽を開くと、うす茶色の煮汁がたっぷりしみていておいしそうだ。細かく切った豚の脂身が入っていて、真ん中には銀杏のような木の実が入っている。瞬く間に平らげてしまった。

同僚たちと連れ立って食堂車へ。

早めに行ったので、まだ食べ物があった。

ビールを飲みながら、宮爆鶏丁ゴンバオジーディン（鶏肉とピーナッツの炒め物）なんかをつついていると、ほかの同僚たちがやってくる。食堂車でトランプをやるようだ。トランプがつくづく好きな人たちだ。

消灯時刻を過ぎてから寝台車へ戻り、通路の折りたたみ椅子に坐って窓の外を見た。

田舎を走っているからだろう。灯りはほとんど見えない。田んぼ

と山の黒い影だけがかすかに見える。こうして一人でぼんやり景色を眺めているとすこしばかりほっとする。なんだかんだと慌しい出張&研修旅行だったけど、夜行列車にも乗れたし、同僚ともよく飲んだし、平凡な毎日をすこしばかりシャッフルしたようで楽しかったな。そこなことをつらつら思っているうちに眠気が襲ってきた。僕ははしごをあがって中段のベッドで身をかがめて靴下を脱ぎ、すぐに眠ってしまった。明日も仕事だから。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5613i/>

中国夜行列車団体旅行

2010年10月8日15時13分発行